

## 創作能 「水城の別れ」

### ～大伴永主と娘子児島の物語～

▷三番目物

▷前シテ 筑紫の娘子

▷後シテ 遊行女婦 児島の霊

▷ワキ 大伴永主

785年に発生した藤原種継暗殺の主謀とされた父、大伴家持に連座しその亡骸と共に隠岐へ流罪となった家持の子、大伴永主。その後生きながらえた永主は僧侶となり、無念の死を遂げた父、家持を弔うべく九州の太宰府へと旅に出た。そこはかつて家持の父、旅人が帥として家族を連れ赴任した地、家持にとって、少年時代を過ごした思い出深い地であった。

亡き父、家持の為の弔いの旅も終盤に差し掛かったころ永主は水城でひとりの美しい娘と出会う。

名を尋ねると美しい娘は「筑紫の娘子」と名乗る。永主が、自分は父を弔う為の旅の途中であることを告げると娘は、自分が遊行女婦であることを告げ自分にも弔いの舞をさせてほしいと願い出た。

それは有難いことだと 申し出を受けた永主。そのあまりの幽美な舞に感激した永主は、父、家持の無念が昇華されたと感じ、旅の終わりを確信する。

娘に深い感謝を告げ、その場を立ち去ろうとした時である。

「家思ふところ進むな風守りよくしていませ荒しその路」

思いがけず娘の口から歌が詠まれた。聞き覚えのあるその歌に永主は大変に驚く。それは父の家持が生前、とても大切にしていた歌であった。「なぜ、あなたがこの歌を知っているのか。」と問う永主。

対して娘は、何も言わず去って行ってしまふ。

一中入り

長旅の疲れか  
旅を終える安堵からか……  
そのまま眠ってしまった永主は  
月の眩しさに目が覚める。

その美しさにしばし目を奪われた永主の前に  
昼間に会った娘が再度、姿を現した。

永主は娘に 亡き父、家持の話 시작했다。

家持は生前、永主ら子どもたちに  
少年時代を過ごした太宰府での生活を懐かしんでは、  
思い出話をしてくれていた……

## 永主の語り

~~~~~  
私の父、家持が、その父であり私の祖父である、旅人と母とともに渡った筑前の国、太宰府。

その国で見る文化がいかにも新しく素晴らしいものであったか、  
そこで働く旅人の姿がどんなに誇らしいものであったか。  
家族で過ごす時間とはいかに幸せなものなのか、

父は私にいつも教えてくれました。

しかし、その幸せはあまりにも儂く終わってしまいました。  
病弱であった母親が赴任してすぐに亡くなってしまったのです。

妻の死を嘆き悲しみ、長旅に同行させた自分のせいだと後悔する  
旅人。

祖父と父に残された生活は  
あまりにも静かで、悲しく、寂しいものでした。  
母親のいない家とは、こうも侘しいものなののでしょうか…………

打ちひしがれる旅人を見るに見兼ね心配した友により、集う会がひらかれました。

そこにはひとりの美しい遊女がおりました。名を児島と言いました。

母のいない家持を不憫に思った児島は、  
その後、たびたび家を訪れ手伝いに来るようになったようです。  
児島が訪れるようになった家には一筋の明かりがともり  
いつの間にか家持は、彼女が来てくれる時を心待ちにするようになりました。

児島は私の祖父、旅人を尊敬し、父の家持を時に姉のように助け、  
時に母のように愛情をかけてくれました。  
父は、今度こそこの日々がずっと続いてほしいと願わずにはいられませんでした。

しかし、その願いも虚しく幸せであった日々が終わりが訪れました。  
旅人が大納言として上京することが決まったのです。

祖父も父も、  
その後、児島とは永遠に逢うことはできませんでした…………

~~~~~

「家思ふと ころろ進むな 風守り よくしていませ 荒しその路」  
(家郷が恋しいとて心を流行らせてはいけませぬ。風のぐあいをよくうかがっていらしてください。荒々しいことです。その路は。)

永主は、

「昼間、あなたが詠んだこの歌は、  
父の家持が太宰府を離れる際、見送りに来た児島から贈られた歌である。」  
と娘に告げた。  
家持はその歌を後生大切にし、大事な場面では必ず  
「気を急いてはいけぬ」と  
この歌とともに子たちに教え諭してくれた事を娘に話した。

永主が再び娘に問う。

「何故、あなたがこの歌をご存知なのでしょう。」

永主の話を静かに聞いていた娘は  
涙を流し、こう告げる。

「私こそがその娘、児島にございます。」

驚く永主。

児島を名乗るその娘はこう続けた。

「ここであなたのお父上、家持様が京へお戻りになるのをお見送りして以来、  
ずっとこの場所で皆様のご無事を祈っておりました。  
あなたのお祖父様、お父様方との暮らしは、  
私にとって忘れがたき幸せな日々でございました。  
京へ戻られては、二度とお目にかかれぬ身。  
もしも来世や再来世があるのならば、もう一度この私を見つけ出してほしい。  
そう願い続けた日々でございました。」

出逢った美しき女性は、

今は亡き、遊行女婦 児島の彷徨える魂であった…………

兎島は

尊敬する旅人のそばにいられ、自分はいかに幸せであったか、  
家持という子に接し、まるで我が子のように感じられた事、  
遊女であった自分が妻となり母となる経験ができた事、  
それらは何事にも代えがたい幸せであったと永主に語った。

時は過ぎ、暗い夜空が白んでくる。

そろそろお別れの時が来たようです、  
私から貴方を見送らせてください、と告げる兎島。

別れの際、兎島は

「貴方のお祖父様である旅人様に贈ったこの歌を、こうして再び貴方に贈れるのですね」  
と言い歌をよんだ。

「凡ならば かもかも為むを恐みと 振り痛き袖を忍びてあるかも」  
(通り一ぺんの想いならば袖を振るなり何なりどのようにもしましょうものを  
恐れ多いことと切に振りたい袖を我慢しております。)

永遠の別れになるであろう、その時でさえ  
身分のちがいのために耐え忍び、人しれず見送らざるを得なかった無念。  
その気持ちを汲んだ永主は兎島へ、こう告げた。

「もう忍ばずとも良いのです。

どうかおもうままに どうかその想いのままにその袖をお振りください。  
そなたの御心 私 が しかと受け止めますから。」

涙をこらえ

後ろを向いた永主が、今一度 振り返ると  
児島の姿はすでになく。

眼前に夜明けの光が一筋見えたその時、  
永主は、爽やかな風の中優しい香りに抱かれるのを感じた。

それは、幼き頃に感じた優しい母のあたたかな香りであった。

冬十二月、太宰師大伴卿の京に上りし時に、娘子の作れる歌二首

○「凡<sup>おほ</sup>ならばか<sup>せ</sup>もか<sup>かしこ</sup>も為<sup>た</sup>むを恐<sup>た</sup>みと振<sup>た</sup>り痛<sup>た</sup>き袖<sup>た</sup>を忍<sup>た</sup>びてあるか<sup>た</sup>も」  
通り一ぺんの思いなら、袖を振るなり何なり、どのようにもしましょうものを  
恐れ多いことと、切に振りたい袖も我慢しております。

卷6 965

○「倭<sup>やまと</sup>道<sup>ぢ</sup>は雲<sup>くも</sup>隠<sup>かく</sup>りたり然<sup>しか</sup>れども我<sup>わが</sup>が振<sup>た</sup>る袖<sup>た</sup>を無<sup>な</sup>礼<sup>れ</sup>しと思<sup>お</sup>ふな」  
大和道は雲の彼方です。雲隠れてお目にふれずとも、どうか私の振る袖を  
無礼とお思いくださいますな。

卷6 966

太宰帥大伴卿の大納言に兼任して、都に向ひて上<sup>みちだち</sup>道<sup>ち</sup>す。  
此の日馬を水城<sup>とど</sup>に駐<sup>とど</sup>めて、府家を顧み望む。時に卿を送る<sup>ふり</sup>府吏<sup>り</sup>の中に、  
遊行女婦あり。其の字<sup>あざな</sup>を、児島といふ。  
ここに娘子、此の別るることの易きを傷み、彼の逢ふことの難きを嘆き、  
涕<sup>なみだ</sup>を拭<sup>ぬぐ</sup>ひて、みづから袖<sup>うた</sup>を振<sup>た</sup>る歌<sup>うた</sup>を吟<sup>うた</sup>へり。

太宰府の長官たる大伴卿が大納言を兼任して都に向かって出発した。

この日、馬を水城にとめて太宰府の家を顧みた。時に卿を送る役人の中に  
遊女がいて、その名を児島といった。

その時、遊女はたやすく別れては再会の難きことを嘆き、涙を拭いて、自ら袖を振る  
送別歌を口ずさんだ。

大納言大伴卿の和へたる歌二首

○「倭<sup>やまと</sup>道<sup>ぢ</sup>の吉<sup>き</sup>備<sup>び</sup>の児<sup>こ</sup>島<sup>しま</sup>を過<sup>つ</sup>ぎて行<sup>い</sup>かば筑<sup>つくし</sup>紫<sup>こしま</sup>の児<sup>こ</sup>島<sup>しま</sup>思<sup>お</sup>ほえむか<sup>か</sup>も」  
倭への道に吉備の児島を通っていくと、筑紫の児島のことが思われるだろうなあ。

卷6 967

○「大<sup>ますら</sup>夫<sup>お</sup>と思<sup>お</sup>へるわ<sup>わ</sup>れや水<sup>み</sup>茎<sup>ずき</sup>の水<sup>み</sup>城<sup>ずき</sup>の上<sup>の</sup>に涙<sup>の</sup>拭<sup>ぬ</sup>わぬ」  
立派な男だと思ふ私は、水茎の水城の上で涙を拭こうか。

卷6 968

筑紫の娘子の行旅<sup>たびと</sup>に贈<sup>たま</sup>へる歌一首 娘子<sup>あざな</sup>は字<sup>あ</sup>を児<sup>こ</sup>島<sup>しま</sup>といへり

○「家<sup>い</sup>思<sup>お</sup>ふと心<sup>こ</sup>進<sup>ま</sup>むな風<sup>かぜ</sup>守<sup>まも</sup>り好<sup>よ</sup>くしていませ荒<sup>あ</sup>しその路<sup>みち</sup>」

家郷が恋しいとて心をはやらせてはいけません。風の具合をよくうかがっていらしてください。  
荒々しいことです、その路は。

卷3 381

大伴旅人と筑紫娘子児島による、上記五つの歌から着想を得てこれらを背景にした物語を、能舞台でみてみたいと思いました。世阿弥ならば、どのような方法でこの世界を表現するのだろう、と考え夢幻能の形を用いて物語を創作しました。

本来、水城の別れが舞台ならば

「旅人と児島」巻6の相聞を、中心にした物語にするのでしようけれどもこの物語はあえて、旅人の子である家持の想いを、その子、永主の語りを通して描こうと決めました。

きっかけは、

京へ向かう別れの際、児島から家持へ贈られたであろう巻3の歌、

「家思ふと心進むな風守り好くしていませ荒しその路」が、

旅人と児島の相聞がおさめられた巻6ではなく、

なぜ巻3におさめられたのか？と疑問に思った事からです。

万葉集の構成として

巻6は、宮廷を中心にした歌が編纂され、

巻3は、巻1、2を補う歌、主に宮廷の雑歌、挽歌、相聞歌が編纂されています。

この巻3を編纂したのが、家持ならば

児島が自分に贈った歌を、父とは別に

自分だけに向けられた歌として、大切におさめたかったのでは？

本当は相聞として成立させたかったのでは？

(当時の家持はまだ少年だった為に歌を詠めなかった)と考えました。

このことから、家持の児島への特別な想いを描きたいと思い

この構成に至りました。

晩年、無念の死を遂げた家持へ、

児島が当時の姿で舞う弔いの場面を作ることで、家持の児島への想いを昇華させました。

また永主と児島、最後の別れの場面にて児島がうたった

～凡ならばかかも為むを恐みと振り痛き袖を忍びてあるかも～に対し、

家持の子である永主が、児島へ一生懸命に紡ぎ出した言葉によって彼女が長年抱え続けた想いから解放され、昇華させることができたのもひとえに、家持の願いであった事と思います。

(この永主の言葉は歌にせず、言葉として残しました。

歌を作ることができずにいた当時の少年、家持の素直な気持ちを

そのままに表現したかったからです。)

最後に、

今回「世阿弥の方法で万葉集の世界を書くこと」に挑戦してみて、途中から、どうすればそれぞれの登場人物が抱える想いを昇華させることができるのだろう、と自分が常に考えている事に気がつきました。

「能」とは成仏の芸術である。

世阿弥はそんな思いで、

秘めた想いに縛られ身動きが取れなくなってしまった登場人物たちを、解放し自由にする為、いくつもの物語を編み出したのではないのでしょうか。

この物語では、

ワキである大伴永主がシテの児島へ、問いかけ、耳を傾け続けた事により児島は長年抱え続けた想いを、ようやく話すことができました。

「話す」ことは「放す」ことだと思います。

その結果、苦しみを抱え彷徨っていた児島の魂は、やっと自由になり安らぎを得ました。

児島には、身分のちがいによる苦しみがあ

り永主にもまた、政治権力の闘争に巻き込まれた苦しみという共通点がありました。

こうして、シテの児島の想いを理解し、それを昇華させて救うことができるワキは、永主において他に適役はいなかったと思います。



